

# 父性の呪縛

永田円了



## Father's Control

人が成長をしていく過程で、親の影響力は強く、また恐ろしいくらいに子どもの意識を支配する。特に思春期における父親の存在は、子どもの将来を左右する。

父親、いや父性と呼ぼう。現実には父親がいない家庭でも、母親が見事に父親役（父性）も発揮して、見事にバランスをとっている例を多くみるからである。しかし、この父性が強力な自らのエゴと手を組むと、子どもを思い通りに操ろうとする。愛情という名の皮をかぶったエゴ父性は、いと簡単に子どもの意識を思いのままにコントロールしようとする。特にそれは、父親と息子の間で顕著に現れる。

### サルの世界には父親は存在しない

サルの世界では、雌サルは複数の雄サルと交尾をし繁殖するため、生まれてきた子どもにとって父親を特定することはできない。よって子どもは母親によってのみ育てられることになる。では、なぜ人間社会は父親を必要としたのだろうか。

人間社会は、家庭を中心とする“私的”領域と、家庭から一步外にでた“公的”領域が存在する二重構造の世界だからである。私的領域では母性が情緒安定を供給する役割を果たし、父性は子どもが公の世界へ出る力を与える役割を果たす。つまり父親役は、子どもがある年齢になって、独り立ちできるように公の世界へ導くことが託されているのである。

ということは、父親不在のサルの世界では、私的領域のみで公の世界は存在しないということである。



### 父性の呪縛が意味すること

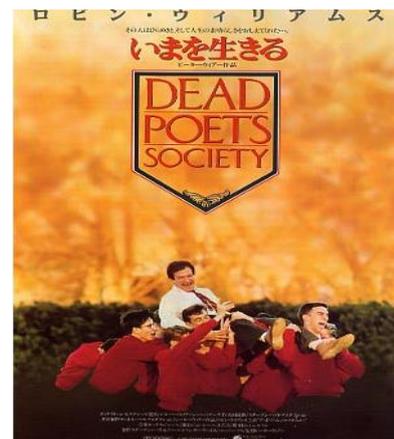
父性のエゴエネルギーは、想像を絶する迫力がある。子どもをどうしても自分も思い通りにしたい。子どもの自由は絶対に許さない。この呪縛にかかった子どもは、へビににらまれたカエルのように、すくんでしまう。この時にとる子どもの行動は三つ。一つ、従順に親の言う通りにする。二つ、反発はするが、親に刃向かう勇気がなく、自己消滅の道にはいる。三つ、呪縛の殻を、自らのエネルギーで破り、脱皮成長を遂げる。

父性の呪縛をよく観察するなら、違った視点が見えてくる。父性は闇の住人になりすまし、「さあ、この闇を越えれば光がみえるぞ！もっと強くなれ！」と、最悪の状況を演出しながらも、子どもの成長を促しているようにみえる。

#### <事例 DVD>

本田圭佑 vs. ネイマールの意識の違い  
 米映画「フッシュ」より／父親に認められたかった  
 オリバー・ストーン監督、フッシュを語る  
 正高信男／サルの世界には父親は存在しない  
 正高信男／人はなぜ父親を必要としたのか  
 映画「シャイン」より／父親の呪縛によって、精神に異常が、  
 映画「英国王のスピーチ」より／皇室の呪縛により、吃音に、  
 映画「今を生きる」より／父の呪縛を破ることができない息子  
 大江健三郎と光／響き合う父と子  
 大江／子どもの成長を妨害してはならない、  
 歌・ロッド・スチュワート／路上シンガーAmy Belle をステージに

円了のホームページ：[www.enryo.jp](http://www.enryo.jp)



1989年のアメリカ映画